

《令和六年度 暗唱②》

へいけものがたり  
平家物語

ぎおんしやうじや  
祇園精舎の  
かね  
鐘の声、

しよぎやうむじやう  
諸行無常の響きあり。

しやらそうじゆ  
沙羅双樹の  
はな  
花の色、

じやうしやひつすい  
盛者必衰の  
ことわり  
理を  
あらはす。

ひと  
おごれる人も  
ひさ  
久しからず、

ただ  
唯  
はる  
春の夜の夢のごとし。

もの  
たけき者も  
ついで  
遂には  
ほろびぬ、

ひとえ  
偏に  
かぜ  
風の前の塵に同じ。



## 【現代語訳】

祇園精舎（古代インドの須達長者が、仏陀のために建てた寺院）の寺の鐘の音は、すべてのものが移りゆき滅んでいくという「諸行無常」の響きをもっている。

沙羅双樹（仏陀が亡くなったところに生えていた木）の花の色も、栄えた者はいずれ必ず滅びゆくという「無常」を示している。

今、驕っている者もその隆盛の時期は長くない、ただ春の夜の束の間の夢のようなものだ。

強力に見える人間も最後には滅びてしまうのだ、

ただ風の前で吹き飛ばされていく塵のようなものに過ぎない。